私の名前は『紅桜(べにお)』。

『ベニザクラ』と書いて『ベニオ』と読みます。『紅緒』ではありません。紛らわしいかと思いますが、ご了承ください。開発者の趣味です。私は被造物なので、造物主に対して意見する権限を持ちません。私自身はネーミングに不満はありませんが、紛らわしいという場合は苦情(クレーム)を受け付けています。

現在、稼働テストとしてマイスター――私の開発者が、趣味で運営しているお店で働いています。主な業務内容は設備の保守点検、備品や食材の管理、接客等(とう)となります。その目的は稼働テストではありますが、この繰(く)り返される日常を観察し、記録する事こそが、私が此処(ここ)に存在する本当の理由なのかもしれません。

私は高度な人工知能(AI)を与えられた自律思考型アンドロイドですが、感情を生み出す人工自我(AS)は研究途上であるため、『人間であるように振舞う』事は可能ですが、それは所詮(しょせん)、模倣でしかありません。此処で働き、人間を学び、心を成長させ、模倣ではない自我を私が獲得する事こそ、マイスターの本来の狙いであるように思えるのです。

私は紅桜(べにお)。

開発コードは『紅ノ姫』。

現在の職業――メイド。

14 戦目

マスター

「――『俺の名前は 橘(たちばな) アサト。ゾイエス学園高等部の三年生だ』」
「目の前の人間に、勝手にアテレコを始めるな」
どうやら私の対応は不満だったらしい。目の前の少年――橘アサトにそう言われ、私は続けるはずだった台詞(せりふ)を中断した。
「申し訳ありません。音声変更(ボイスチェンジャー)機能は搭載されていないため、貴方(あなた)の声を再現する事は不可能です」
「声真似(まね)のクオリティはどうでもいい。俺が不満なのはそこじゃない」
お約束の独白(モノローグ)を始めるのが面倒なのだと思い、私が代わりにと思ったのだが、彼の求めている行為ではなかったらしい。
「だいたい、なんだその如何(いか)にも日常系ラブコメの冒頭の主人公みたいなテンプレ台詞」
「様式美です。つかぬ事をお伺(うかが)いしますが、アサト様は何度目の高校三年生ですか？」
「……留年なんてしてないぞ」
私の問いに、彼は怪訝(けげん)そうな表情を浮かべている。当然だろう。人によっては馬鹿にされていると取られても仕方のない質問だ。
「失礼しました。ほんの冗談(ジョーク)です」
今回も『ご都合主義(リセット)』は正常に行われた事を確認。
「では、何がご不満なのでしょう？」
「不満というか、めんどくさい。その店長って、俺がやらなきゃ駄目か？」
マイスター――私の開発者が趣味で運営している『きょくちせん屋』という店がある。今年の春から少し状況が変わり、店長を置く必要が出てきた。その白羽の矢が立ったのが彼であり、その説明を終え、無言になったのがつい先ほどである。
「マイスター曰(いわ)く、アサト様が適任であると」
「なんだよ、適任って。給料も出ないんだろ？　そもそも、どんだけ時給が良くても面倒な事はやりたくない」
聞きしに勝る面倒くさがりぶりだ。徹底して、やらなくていい事はやりたくないらしい。
「……困りました。アサト様にやっていただくほかないのですが、どうすれば引き受けていただけるのでしょうか」
管理人であるマイスターならば可能なのだろうが、私には彼に強制する権限がない。
考えた結果、私はインターネットにその答えを求めた。
無線による接続――オンライン状態を確認。
検索ワード――男性に頼み事をする方法。
該当――色仕掛け。

なるほど。検索結果をざっと総合すると、いわゆるハニートラップがこういう場面において定石らしい。だが、私の幼い容姿に対し、彼は劣情を催すだろうか。それ以前に、私は機械で、生身の人間ですらない。そういった嗜好の男性も少なからず存在するが、果たして彼は該当するだろうか。

「……」

意識を彼に戻すと、何か思うところでもあるのか、彼が私を見つめていた。オンライン接続から、時間としては三秒と経過していないため、焦れている訳ではないだろう。劣情を催している訳ではないらしく、表情は変わらず気怠いまま、股間部にも膨張した様子は見られない。

そこで私は椅子から立ち上がり、彼の眼前まで顔を近付け――

「……っ!?」

彼の唇に自分のそれを重ねた。

一瞬、硬直し、彼はすぐに身体ごと私を引きはがした。両肩を握られ、軽く押された感じだ。嫌悪感のようなものは表情からは窺えないので、迷惑という訳ではなさそうだ。雰囲気を作った方が良かっただろうか。

「あー……なんで、キス？」

「目線を合わせて相手を見つめるのはキスのサインかと。違いましたか？」

「それは恋人同士の場合だ」

「アサト様に求められた場合、すべてを受け入れるよう、私はプログラムされています。それはつまり、恋人と同義では？」

私は可能な限り人間の女性を模して造られている。さすがに妊娠は出来ないが、性行為のための知識と機能も組み込まれている。

「マジか……」

そう伝えると、彼は複雑な表情を浮かべ、若干、私から視線を逸らした。多少なりとも興奮を覚え、それに対する罪悪感も同時に抱えているといったところだろうか。少なくとも、私の幼い容姿は完全に守備範囲外という訳ではないようだ。

「……はあ。判ったよ」

渋々といった様子を隠そうともせず、深い溜息と共に彼は言った。

「店長、やればいいんだろ？」

「よろしいのですか？」

「断って、よからぬ事を言いふらされちゃたまらん」

私がアンドロイドである事は一部の関係者しか知らない。つまり、私が彼に唇を奪われ

たと吹聴(ふいちょう)して回れば、待つのは社会的な死である。この手の事案において男性の立場はひどく弱い。

「ありがとうございます。引き受けていただけて助かります、アサト様」

弱みを握って脅迫するつもりなどなかったが、せっかくの機会(チャンス)をふいにする必要もない。私はただ感謝の言葉だけを告げた。

「あと、それだ。その呼び方、なんとかならんかね」

『アサト様』ですか？　次の候補は『ご主人様』『主様(あるじ)』『旦那(だんな)様』となりますが」

「なんでそんなに偏(かたよ)ってるんだ……もっと普通に『店長』とか、せめて『さん』付けとかあるだろ」

そう言われて、ふと思い浮かんだ呼称があった。

「――では、『マスター』とお呼びします」

彼をそう呼びたいと感じた。

プログラムでなく、自身の中から沸(わ)き上がった衝動。

これが人工自我(AS)の成せる業(わざ)――『心』なのだろうか……。

「それも大概(たいがい)な気がするけどな……まあ、他よりはマシか」

『マスター』という呼称が気に入った訳ではなく、あくまで妥協案として受け入れてくれたようだ。

「あくまで形だけの店長だからな。えっと……紅桜(べにお)、でいいのか？」

不思議な感覚だ。彼に名前を呼ばれると、処理能力に負荷がかかったような、しかし異常(エラー)とは違う、正体不明の現象が発生した。

速やかに自己診断モードへ移行の必要を確認。

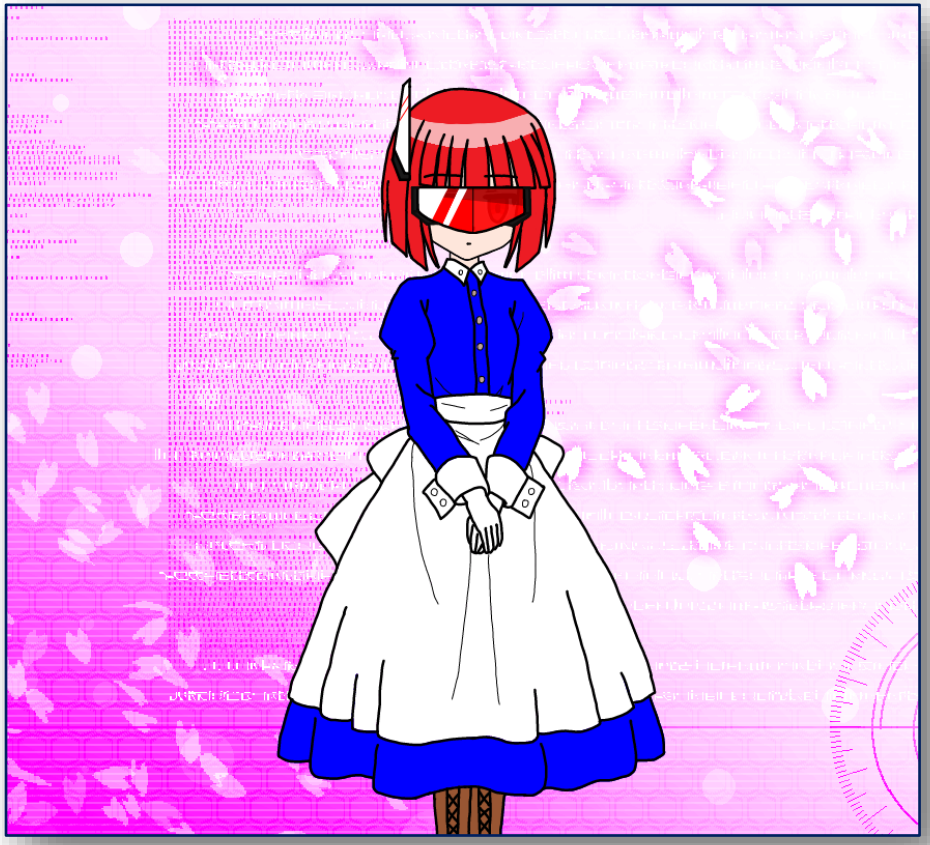
「はい。これからよろしくお願いします――マスター」

正体不明の感覚はさておき。

今日この瞬間、橘(たちばな)アサトは私のマスターとなった。

Mission complete

6　そーりょくせんっ！ All Around ASSAULT-SYSTEM　14 戦目 マスター



あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『そーりょくせんっ！』十四戦目をお届け致します。

本日をもって、当サイトは五周年となりました。このシリーズもリセットの時期となり、キャラも増え、サイトの一部リニューアルもあったので、ここからは第二期とさせていただく事にしました。まあ、看板娘達が働いている『局地戦・改』の店名が、『きょくちせん屋』に変わったのと、まだ劇中で触れてない部分での変更点がある程度ではありますが。

新キャラ・紅桜（べにお）について。

ロリで、感情が薄くて、しかもロボ娘（こ）！

ツバキ辺りから箍（たが）が外れてしまったのか、性癖全開です。無表情キャラはロリにする事で破壊力が増す――その持論に基（もと）づいて生まれました。過去作のキャラと関係があるのかは秘密です。個人的にはニヤニヤしながら書きました。

よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。おかげさまで新サイトになって五年経ちました。創作意欲が枯（か）れるまで続けますので、よろしければお付き合いください。アンケートは本当に励みになるので、お時間が許せば送ってください。コメントはなくても構いません。読まれていると判るだけで充分なので。

２０１９／３／27　流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりょくせんっ！』ページに戻る